

BS FAN

月刊 ビーエスファン

唯一のBS放送番組情報専門誌!
1月のBS&CS番組表+BS放送年末年始特番ガイド
BS10チャンネル+スカパーフェクトTV!
12|26火 **1|31**水

2001
February **2月号**
定価 **360円**

最新公開映画の俳優たち

メル・ギブソン&ヘレン・ハント
ジム・キャリー
イーサン・ホーク
エドワード・ノートン

スター・セレクション・ファイル

ハリソン・フォード

AV最前線

お年玉+αで買える
簡単サラウンドシステム

潜入・映画製作現場

『溺れる魚』

タイトルシール100本

東京宝塚劇場完成

『ベルサイユのばら2001』制作発表



12/26・1/31 37日分の
番組表掲載!!

徹底ガイド!! 年末年始特番

編集部・BSデジタル放送
ワクワク体験記

BSfanは
BS放送の番組情報
専門誌に
生まれ変わりました!

そもそもサラウンドって何だ？

過去、オーディオをリードしてきたのは映画。70年代には映画館用スピーカーを家庭で使うのがマニアの間で流行したほどだ。ステレオ化でも映画が先行した。映画では音も重要な要素。観客動員が見込まれるとなれば新しいシステムをどしどし導入する。でステレオやサラウンドの立体音響が発達した。

ステレオでもかなりの立体感はある。スクリーン方向、つまり奥行きは表現できるが、観客を包み込むような音の臨場感は得られない。シネマや70mm作品では6チャンネルの立体音響が使われたが、これで再生できるのは大きなロードショー館だけ。そこでステレオ音声に臨場感のためのサラウンド情報を入れることを考えたのがドルビーステレオだ。

客席の左右や後ろにもスピーカーを配置して観客を包み込むような音場空間をつくり出す。家庭用のサラウンドシステムも同じだが、家庭の視聴環境や再生ソフトに合わせてセットできるような様々なモードが加えられている。

サラウンドの代名詞「ドルビー」って何？

カセットデッキのほぼ全てにドルビーマークが付いている。スタジオ用から家庭用まで音質に影響なくノイズ低減を可能とするシステムを作ったのがレイ・ドルビーであり、ドルビー研究所なのだ。

この技術は映画にも採用され、当時の光学録音映画の音質が飛躍的に向上していった。

70年代の後半になるとオーディオ界では日本メーカーを中心に、4チャンネルステレオが盛り上がりつつあった。映画でこそサラウンドの良さが発揮されるとドルビー研究所は映画にサラウンド効果を使

映画とともに歩んだサラウンド音響の歴史

1940 初のマルチチャンネル
「ファンタジア」 C+L+R
モノラル音声以外としても初めての映画。ファンタサウンドの異名をとるも、当時国内ではステレオでの上映はされなかった。

1953 リア(サラウンド)チャンネルの使用
「肉の罠人形」 C+L+R+S
サラウンドによるサスペンス効果の向上を提示。本作は2台の映写機を使って立体映画としても上映。

20世紀フォックスが手掛けたシネマスコップ方式で、35mmフィルム上への磁気録音を可能として、マルチチャンネル録音が行なわれる。
シネマスコップ映画第1作「聖衣」(1953)

1965 ドルビーAタイプNR
「オリバー」「ライオンの娘」
C+L+R
サウンドトラックの音質改善に使われていたドルビーAタイプNR(ノイズリダクション)を使用。

1971 「時計じかけのオレンジ」
エンドロールに初めてドルビーラボラトリーズのクレジットが入った記念碑的作品。

1975 ドルビーステレオ
「トミー」「リストマニア」

1976 ドルビーステレオをマトリクス処理
「スター誕生」

1977 ドルビーステレオが確固たる地位を確立
「スター・ウォーズ」
「未知との遭遇」

1987 ドルビーSR (Spectral Recording)
「ロボコップ」「インナースペース」

1990 CDS (シネマデジタルサウンド)
「ディック・トレシー」「デイズ・オブ・サンダー」
ORC(Optical Radiation Corp)とコダック社による世界初のデジタルサラウンドが登場

1992 ドルビーデジタル 5.1
「バットマン・リターンズ」
ドルビーSR・Dとも呼ばれる。ドルビーのデジタルサラウンド。チャンネル間のセパレーション、サラウンドのステレオ化など顕著な改善が施され、映画業界のスタンダードなデジタルサラウンドとなる。

「ドラキュラ」 ※日本国内では93年の本作で初めてドルビーデジタルが登場
「ゴジラvsメカゴジラ」 ※国内初のドルビーデジタルによる作品

1993 DTS 5.1
「ジュラシック・パーク」
サウンドトラックを映像フィルムと分離させることで高音質化を図ったデジタルシニアシステム。

SDDS 5.1+LC+RC
「ラストアクションヒーロー」
前方5チャンネルとサラウンド2チャンネルによる8チャンネルシステム。

1999 ドルビーデジタルEX 5.1+RC
「スター・ウォーズ エピソード1/ファントムメナス」
現在最新のサラウンド方式。



ドルビーラボラトリーズ・サンフランシスコ本社ビル(旧社屋) 「ドルビー」産みの親、レイ・ドルビー氏



う方式を提案。これがドルビーステレオで、「スター・ウォーズ」や「未知との遭遇」でその良さが認識される。ここからドルビーの快進撃が始まる。ドルビーがサラウンドの代名詞になったのだ。より音の移動効果が高いプロロジックを生み出し、90年代に入るとデジタル化も行なわれ現在にいたるがドルビー研究所が求めているのはスバリ「高音質」。サラウンドはその延長線上の一つではないのだ。

主要サラウンドフォーマット一覧

チャンネル数	名称	解説	イメージ
1チャンネル	モノラル	1チャンネルの音声。ステレオ音声の再生は左音声のみか、左右の混合で出力。2つ以上のスピーカーでも全く同じ音が出力されているケースではそれはモノラルである	
2チャンネル	ステレオ	2つのスピーカーを持った機器から左右で違う音が聞こえている状態。スピーカーの数が増えてもモノラルと同様に本数に関係なく2チャンネルである	
4チャンネル	ドルビーステレオ	映画館用の4チャンネルサラウンド音声規格。左、右、センターの前方3本とモノラルのサラウンドスピーカー(アレイ)で再生。台詞が中央のセンタースピーカーに固定されるため浮き立つ。	
	ドルビーサラウンド	ドルビーの初の家庭用サラウンド音声規格。ドルビーステレオを簡略化したシステムで左、右の前方2本と後方2本(モノラル)のスピーカーを使用。センターは左右スピーカーによるフロントムとなる。	
	ドルビープロロジック	ドルビーステレオを家庭用に改良したサラウンド音声システムで前方の左、右、センターの3本と後方2本のスピーカーを使用。ドルビープロロジックの登場で家庭でも映画館のサラウンドが楽しめるようになった。	
5.1チャンネル	DOLBY DIGITAL	前方2本、センター1本、後方2本とサブウーファの計6本がそれぞれ別の音を出力するもの。音の移動感や臨場感が表現できる。サブウーファーが低音域だけの出力のため0.1チャンネルと数えられ、5.1チャンネルと呼ばれる	
	DIGITAL DTS SURROUND	デジタルシニアシステムズの略。音声の記録容量が大きく(別述のCD-ROMに記録するほど)圧縮率が低いため、ドルビーデジタルと比べてよりオリジナル音声に近い音を再生させる	
	SDDS	ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンドの略。ソニーが作ったシステムでドルビーデジタルと同様、5種類の音声と1種類の重低音を出力。映画館だけの音響システムで民生用機やソフトは発売されていない	
6.1チャンネル	ドルビーデジタルサラウンドEX	ドルビーデジタルの5.1チャンネルに、後方中央スピーカーを1本プラスした計7本がそれぞれ別の音を出力する最新サラウンドフォーマット	
	DTS-ES	DTSの7チャンネルバージョン	
その他	バーチャルサラウンド	仮想音源によりリアスピーカー、センタースピーカーを作りだし、2つのスピーカーだけでサラウンドが楽しめるシステム。バーチャル効果を作るバーチャライザーとして認定されている技術には3Dアフォーニック、バーチャルソニック、VMAx、A3D、Qsurround、N-2-2DVS、TruSurround、Sensaura、RSX、インクレディブル3Dサラウンドなどがある。	

3大サラウンドデータファイル

	ドルビープロロジック	ドルビーデジタル	DTS
記録方式	アナログ	デジタル	デジタル
チャンネル数	記録2ch/再生4	独立5.1ch	独立5.1ch
転送レート	—	640 kbps(最大)	平均1,536kbps
圧縮率	—	約1/10	約1/4
サラウンド周波数帯域	100 Hz~7 kHz	20Hz~20 kHz	20Hz~20 kHz
サブウーファー帯域	オプション	20Hz~120 Hz	5 Hz~120 Hz
ダイナミックレンジ	約60 dB	約105 dB	約120 dB

※C=センター/L=レフト/R=ライト/LC=センターとレフトの間/RC=センターとライトの間/S=サラウンド